

平成 25 年度 鍼灸等研究費研究成果 要約	
研究課題名	鍼灸は妊婦の安産に貢献できるのか？ -温灸療法が妊婦の分娩および QOL に与える効果-
班長 氏名 / 所属機関	安野富美子 東京有明医療大学 保健医療学部 鍼灸学科
班員 氏名 / 所属機関	家吉望み・梶原祥子 東京有明医療大学 看護学部 看護学科 辻内敬子 せりえ鍼灸室
成果	
1. 目的	妊娠期のマイナートラブルの発症は、妊婦 QOL を低下させる主要な要因となる。さらに、冷え症妊婦においては異常分娩の原因の可能性も指摘されており、その対策は重要な課題である。薬物療法は、妊娠中には制限されるため、適切な非薬物療法が求められるが、妊婦のマイナートラブルには鍼灸で効果的とされる症状が多く含まれている。しかも、鍼灸療法は有害事象が極めて少ない身体に優しい非薬物療法であり、特に温灸療法はセルフケアとして行えるところに特色がある。鍼灸療法を妊娠中の妊婦のマイナートラブルケアとして用い、QOL の向上を図り、正常分娩（安産）へと導くことができれば有益である。そこで本研究では、温灸療法が妊婦の分娩の状況および QOL に与える効果について、温灸療法群と対照群で比較検討し、温灸療法が妊婦の安産に有益であるかを検討した。
2. 内容	1) 対象と方法：対象は、妊娠の経過が安定している妊婦とした。一般健康診査を受診し、正常な妊娠経過を辿る日本人女性で、本研究の趣旨と研究内容に同意し、書面で同意が得られた妊婦とした。除外基準は、妊娠中に医療的処置を必要とした妊婦は脱落例として扱い、対象から除外した。研究デザインは、非ランダム化比較試験とし、温灸群（A 院）と対照群（B 院）を設定した。評価方法は、分娩の状況；①分娩所要時間②出血量③会陰裂傷の有無（度数）④前期破水の有無⑤切迫早産の有無⑥微弱陣痛の有無とした。また、QOL は健康関連 QOL である SF- 36V2 TM(the Medical Outcomes Study Short-Form 36) のアキュート版（以下、SF-36）を用いた。また、温灸群は、有害事象の有無と程度について調査した。介入は、温灸群には、妊娠 24 週から「三陰交」「湧泉」「太溪」（または「築賓）」とし、左右計 2～6 か所、各 1～3 壮を、週 3～7 回妊婦のセルフケアにて行った。評価の時期は、①妊娠 16～24 週②28～29 週③32～33 週④36～37 週、および出産後（分娩の状況調査）とした。 2) 倫理的配慮：東京有明医療大学倫理委員会の承認を得たうえで行った。利益相反はない。

3. 成果/考察	<p>分析対象は温灸群 106 例、対照群 91 例である。①分娩所要時間、出血量ともに初産婦で温灸群が有意に低い値であった。②会陰裂傷は、対照群が温灸群の約 1.8 倍で、裂傷の程度も温灸群が軽度であった。③切迫早産は、対照群が温灸群の約 1.7 倍であった。④前期破水は、対照群が温灸群の約 1.4 倍であった。</p> <p>⑤微弱陣痛は、対照群が温灸群の約 3.4 倍であった。⑥SF36 による QOL スコアは身体機能 (PF)、体の痛み (BP) が温灸群は対照群に比して 36~37 週で有意に高い値であった。⑦有害事象は、軽度火傷が報告されたが、その多くが熱さを我慢したものであった。</p> <p>以上より、温灸療法は、妊婦の QOL を高め、安産 (正常分娩) に貢献できる可能性が示された。</p>
----------	---